

現場感にこだわり、3日間の集中講座で 監査の現場を忠実に再現

2018年度春学期ティーチングアワード受賞
対象科目：監査現場シミュレーション

2005年に創設された大学院会計研究科では、アカデミックな要素と実践的な要素の両方を揃えるという狙いがあった。そのうち実践的な授業のひとつとして設けられたのが、この「監査現場シミュレーション」という科目だ。この授業を10年以上担当している嶋田講師は、4大監査法人のひとつであるトーマツの現役公認会計士であり、その経験に基づくリアルな内容が高く評価されて本賞の受賞となった。

徹底的にリアリティを追求した シミュレーション体験

夏期集中講座として設定されているこの授業は、8月下旬から9月上旬に3日間の日程で終日実施される。いわゆる講義を行うのは初日のガイダンスと最終日のフィードバックで各1時間程度。残りはすべて実践形式となる。

その内容は設定した会社に対する監査業務のシミュレーションだ。学生の定員16名が4名ずつのチームを作り、監査としてその会社の会計資料を読み込み、嶋田講師が演じる会社の複数の担当者にヒアリングを重ね、問題点をあぶり出していく。最終日には社長への報告という設定でプレゼンテーションを行う。

学生たちがインタビューする会社の担当者役は、すべて嶋田講師がひとりで演じ分ける。経理部長、工場長、営業部長などさまざまな役回りを名前や家族構成などまで決めておくだけでなく、“営業部長は部下が不正をしていることを知らない”など細かく設定し、その役になりきるのだという。

「事例はすべての資料があるわけではないため、時に講師として困ることもあるが、実際に現場で起きている資料未提示の事例のクライアントとのやりとりを織り込



嶋田 聖

早稲田大学非常勤講師

みながら対応しています。“これは授業だから作っていない”とは口が避けても言いません。

ここまでリアリティを追求するのは、現場を忠実に再現したいという強い思いがあるからだ。「これは研修なのだ」という空気があると学生は途端に冷めてしまうので、シミュレーションであることを絶対に感じさせないこと。そこは強くこだわってきました」。

授業には、ティーチングアシスタントとしてトーマツの若手会計士4名も参加しており、各チームのナビゲート役となってサポートする。シミュレーション中、自分自身は一切講師としての顔を見せないため、気づいた点があれば裏でティーチングアシスタントを呼び出し、うまくナビゲートするように伝える。

「ティーチングアシスタントに対して口を酸っぱくして言っているのは、決して答えを教えないということです。教えるのではなく考えさせること。そもそも世の中には正解などないのに、質問すれば回答がもらえるとなったら受験勉強と同じになってしまう。聞かれたことを他のメンバーに“君はどう思う？”と投げかけ、そこから議論が

生まれて、チームとしてひとつの意見が生まれていきます。監査というのはチームでの作業なので、こういうプロセスも実際にはとても大事です」。

教科書からは得られない、 必須スキルや醍醐味を伝えたい

この授業でもっとも重要なのは「監査現場で実際に起きていることを体験してもらうこと」だ。その背景には、現状の公認会計士のための試験勉強は、監査の現場を知らない中だとイメージがつきづらいという部分もあるという危機意識がある。「私自身も実務を体験してみて、想像していたイメージと全然違うことに驚きました。これを学生のうちに体験してもらえば、何のためにどんなことを学ばなくてはいけないかを理解できるので、明確な目的意識を持って試験に臨めると思うのです」。

現場に必要なのは、会計の知識だけではなくビジネスコミュニケーション能力だという点も強調している。「監査という仕事は数字が正しいかどうかを見るだけではありません。数字を見て正しいかどうかの証拠を集めながら、数字の背景にある取引の物語、会社の個性を見極めていくのです。その中でのクライアントへのヒアリングを重ねたりしていく過程には、心理戦の部分も多々あります」。調査を重ねるうちに見えてくる経営上の問題点を指摘して具体的な会社の実態に沿った提言をすることで入り込む必要もあるのだという。「会社の規模が大きくなるほど経営者の目は行き届きづらくなる傾向があります。一般に部下は良い情報しか上司に伝えない傾向があるので、第三者である私たちが会社の現場にある具体的な問題点を伝えると経営者も喜んでいただきます。その結果会社が良くなれば投資家も経営者もハッピーになれます。それができるのは監査の醍醐味でもあるので、そんな魅力もぜひ伝えたいですね」。

現場を知れば目的意識が明確になり、 勉強への意欲が高まる

社会の仕組みをある程度分かってから進学した社会人経験者と違って、学部の卒業生がそのまま進学した院生については、「社会人未経験者の中には、公認会計士の試験に受かること自体が目標になっている人も中にはいる。淡々と受験勉強を続けていると何のために勉強するのか分からなくなりがちですが、この授業を受けることで目的意識がハッキリするという効果があるようです」と話す。

最終日の夜には懇親会を開くが、「楽しかった」という言葉より「疲れました」という感想の方がうれしいと語る。「準備のために徹夜したという話も聞きます。私の作ったコンテンツのためにそこまで一生懸命取り組んでくれたというのは、私としても大変充実感があります」。

約10年間この授業を続けてきて、最近「出戻り組」が出てきたと顔をほころばせる。この授業を受けた卒業生がトーマツに就職し、ティーチングアシスタントとして手伝ってくれるケースが出てきたのだ。「この科目を設定してくださった先生方と、いつかそんなことになればいいねと言っていたことがやっと実現しました。彼らの存在そのものが、今ここでがんばれば明るい未来があることを見せてくれるわけですから、その効果は絶大です」。

26歳で初めて授業を担当したときは年上の学生もいてかなり緊張したという。「自分自身も業務での経験を重ねて成長することが授業の価値を高めると信じ、人の2倍の速度でスキルを吸収しようと努力しました」。

当初は10人弱だった履修生も、次第に口コミが広がり、最近では定員を超える希望者が出ている。「授業の質が以前より向上したとすれば、今は落ち着いてふるまえる分、よりリアリティを出せるようになったかもかもしれませんね」。